

# 東日本大震災支援（平成23年6月22日～25日）

救命救急センター 江部 克也

私個人としての3回目の福島への出勤は、会津若松地域の避難所巡回業務でした。

発災からすでに3か月が経過していること、直接の被災地ではないことなどから、比較的落ち着いた雰囲気の出動しました。石巻や福島市などと比べても近く、時間的余裕もありましたので、喜多方ラーメンを食べてから、集合場所の会津若松保健所に乗り込みました。

保健所長の事前説明では、「けっして遠慮しないでください。地元にお金を落としていってください」との助言があり、夜は救護班員の親睦を連日深めました。

しかし、当然昼間は、至ってまじめに避難所巡回をしていました。対象のほとんどは福島原子力発電所周辺から避難してきた方々で、磐梯山や猪苗代湖周辺のホテルやペンションなどのいわゆる二次避難所に滞在しており、全体を統括している保健所側から指示のとおり動きました。

数日に1回くらいで救護班が巡回してくるスケジュールになっていたと思いますが、定期受診の必要がある方は、原則として、近くの医療機関に通院すること、と決められていました。

担当する避難所を訪れると、食堂や、やや広い部屋に臨時の診察室を作ります。準備ができた頃に、「救護班が来ていますので、希望者は〇〇へ」などの放送が入ります。

初期の頃の避難所巡回では、気持ちが昂揚している人も多く、いろいろな話をしてくれましたが、この頃は、もうあまり話すこともないけど、まあ血压でも測ってくれ、という感じの方がほとんどでした。

機転のきく方は、なんとかして車をとりに戻ったりしたようですが、周辺にお店もない山の中の一軒宿に滞在している場合で、移動手段のない方は、その後どうしただろうな、と思出すことがあります。

明治21年に磐梯山が噴火し、多数の死傷者が出たときの赤十字の活動が、日本における初めての災害救護活動であり、世界においても（戦時救護ではない）初めての平時の救護活動が行われたのが会津若松です。平時救護発祥の記念碑が、猪苗代湖近くの五色沼のほとりにあります。

さすがに観光客もほとんどいなかったですが、そこを詣でて、会津の地を後にしました。

## 救護班(福島) 6月

人工腎センター 佐藤 由美子

6月22日から25日まで福島県会津地域への救護活動に参加しました。すでに、震災3か月が経過していたので、医療救護班等支援体制が整っており、薬剤師会、保健師、心のケアなど数班による活動が計画的に行われていました。

今回の活動は、会津地域内の猪苗代町、北塩原村などのペンションやホテル、温泉旅館などの2次避難所への巡回診療でした。周辺の開業医や病院は通常診療を行っており、巡回診療終了予定となっていたため、最終の巡回診療となりました。すでに地元医療機関を受診している方もおり、避難所から近隣診療機関へのバスが運行されているところもありました。

巡回先は主に浪江町、飯館村など福島第一原子力発電所の事故により避難を強いられている方々の避難所でした。家族ごとで1部屋になるなど、プライバシーも確保され、食事や入浴など生活環境も整ってはいましたが、何時まで続くのかわからない状況で、疲労がみられました。

活動は、継続診療へつなげるための診察、紹介状の作成、感冒症状、関節痛や腰痛などの症状のある患者さんの診察、介助でした。診察は要らないが、気になるのとと血圧測定などを希望される

方もいられました。受け入れ先のペンションの方で体調を崩されている方もいらっしゃいました。体育館で大勢が寝泊りしている1次避難所の環境と比べると、ずいぶん整っているものの、長引く避難生活は、身体的にも精神的にも体調管理することはとても大変に思われました。診察に来られた方々も、何時まで続くのかなど先の見えない不安を訴える方もいらっしゃいました。

私は4月の福島について2回目の救護活動でした。今回の活動を通して感じたことは、赤十字病院に勤務していれば、災害時救護出動もありうると思っけていても、どこか人事のようなところがありました。実際、救護班にいたのは5年以上前で訓練や活動も忘れてしまっていました。このような大規模災害や長期間の救護活動があれば、現在の救護班だけの活動では困難なこともわかります。災害はいつ起こるかは予測もできませんが、要請の可能性もあるのだと改めて実感しました。現役救護班の方々は色々な訓練や備えをされていると思いますが、今回のように活動を要請される可能性があることも含め、職員に向けての説明や訓練などの機会があってもいいのかもしれないと個人的に思いました。